

スケトウダラ ベーリング公海

Walleye Pollock, *Gadus chalcogrammus*

管理・関係機関

中央ベーリング海におけるすけとうだら資源の保存及び管理に関する条約 (CCBSP)

漁業の特徴

1980 年代半ば、200 海里体制が確立され、我が国の北洋底魚漁業がベーリング海大陸棚漁場を失いつつあったころ、我が国がアリューシャン海盆に生息する本種資源を対象とする中層トロール漁業を開発した。漁場はベーリング海中央部の公海域に設定された。我が国ほか、韓国、ポーランド、ロシア、および中国が操業した。漁場となる海盆地には成魚のみが分布することから、未成魚は周辺の大陸棚海域で生活していると考えられる。全漁業国は、資源状態の悪化に伴い 1993 年にこの公海漁業を自主的に停止した。1995 年以降は CCBSP による措置に基づき漁業停止が続いている。

生物学的特性

- 体長・体重：尾叉長 60 cm・2 kg
- 寿命：10 歳以上
- 成熟開始年齢：4～5 歳
- 産卵期・産卵場：3 月、アリューシャン海盆南東部
- 索餌期・索餌場：アリューシャン海盆
- 食性：桡脚類、オキアミ類、魚類など
- 捕食者：魚類、海鳥、海産哺乳類など（幼魚期）、海産哺乳類など（成魚期）

漁獲の動向

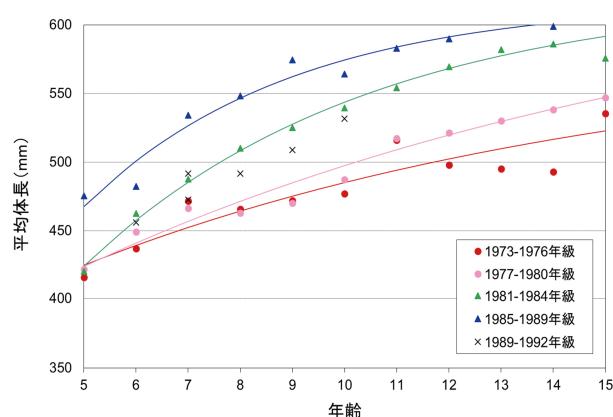
漁獲量は開発当初の 1985 年から急増し、1989 年には日本、韓国、ポーランド、ロシア、及び中国により 145 万トンに達した。しかし、1989 年をピークに漁獲量は激減し、1992 年には資源状態の悪化により、1 万トンまで落ち込んだ。1994 年以降の漁獲量は 0 となっている。

資源状態

本海域資源では、冬季のアリューシャン海盆南東部のボゴスロフ諸島周辺水域（以下、特定水域）に産卵親魚が集群する。日米の調査船調査により推定された、特定水域の親魚の現存量は、1980 年代後半には 200 万トンを超えていたが、1990 年代に入って激減して 1994 年には 50 万トンを下回り、2000 年代以降は低位水準が続いている。2018 年の米国調査による推定値は、やや増加して 66 万トンであった。CCBSP の規定に従い、特定海域に資源量の 60% が分布と仮定すると、本資源の分布域である海盆全域の資源量は、約 110 万トンと推定される。この資源量は、漁業の全盛期であった 1980 年代後半の推定値の 4 分の 1 程度の低水準となっている。

利用・用途

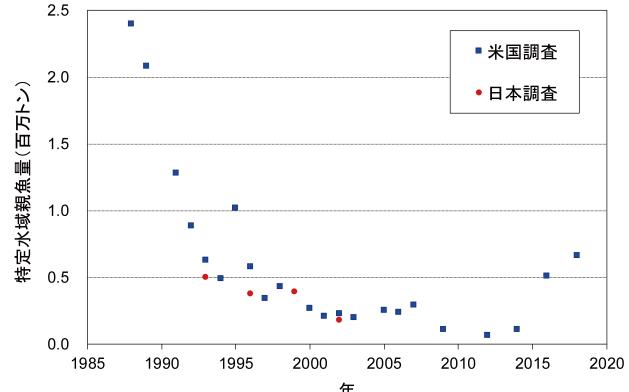
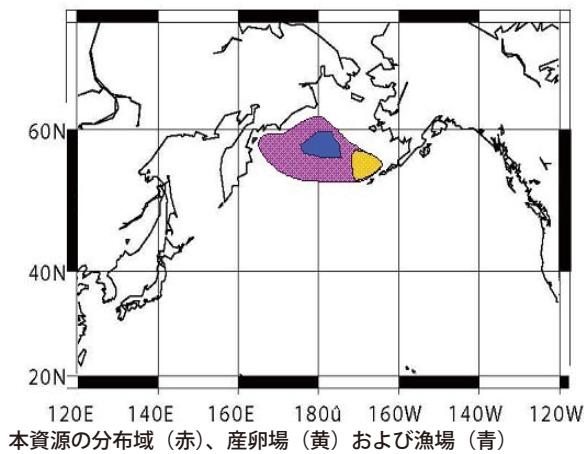
主にすり身原料や、たらことして利用される



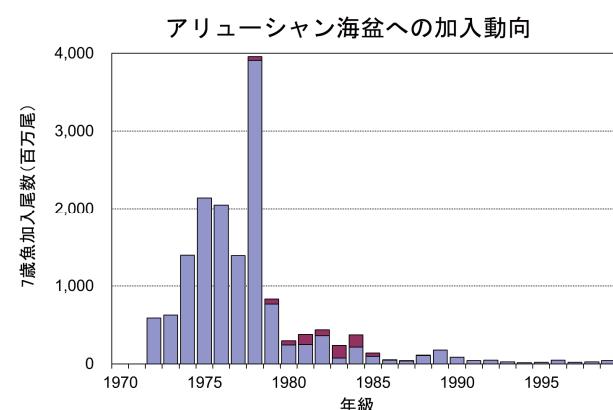
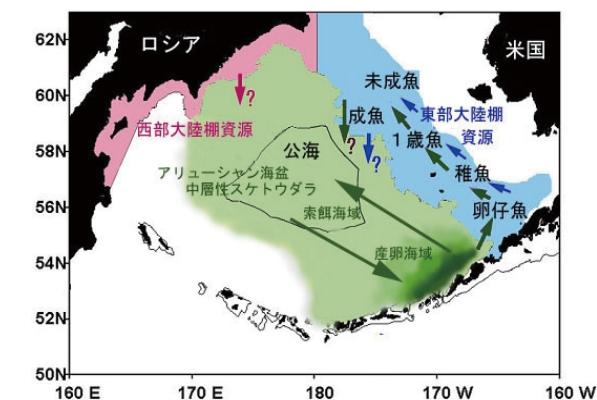
アリューシャン海盆スケトウダラ（雌）にみられる年齢・体長関係の経年変化

管理方策

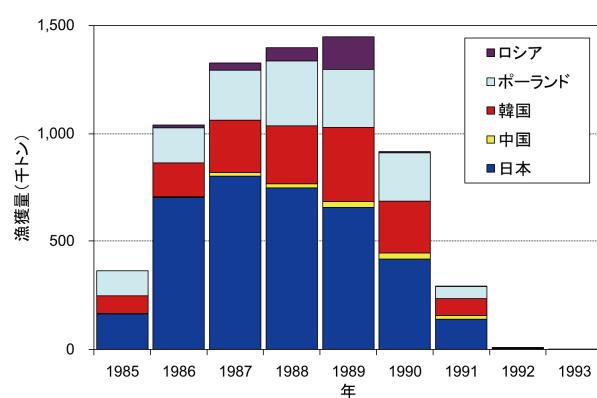
本資源は、国際条約の CCBSP により管理されている。特定水域の調査結果から ABC を決定し、加盟国が合意した漁獲可能水準（AHL : Acceptable Harvest Level）が得られる場合にはこれを採用する。しかし、合意に至らない場合、漁業再開のためには 1990 年代初頭の水準に達することが必要であるとの考え方から、海盆の資源量が 167 万トンを越すことが必要とされる（特定水域の現存量はその 60% の 100 万トン）。この場合の AHL は、条約附属書により設定されている。CCBSP の 2018 年の締約国年次会議、および科学技術委員会では、資源は依然として低水準であると判断され、資源の回復が十分でないため、1995 年以降の AHL が 0 の漁業停止状態を引き継続することとなった。



特定水域における日米調査船調査による中層性スケトウダラの現存量（親魚量）推定値



特定水域で米国調査により捕捉された 7 歳魚加入尾数
(1988 年以前の加入尾数は生残率から逆算された推定値を使用；赤は漁獲減耗)



ベーリング公海でのスケトウダラの国別漁獲量

スケトウダラ（ベーリング公海）の資源の現況（要約表）	
資源水準	低 位
資源動向	横ばい
世界の漁獲量 (最近 5 年間)	0 (漁業停止)
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	0 (漁業停止)
管理目標	条約附属書に規定された親魚量に回復 167 万トン(1990 年代初頭の資源水準)
資源評価の方法	特定水域現存量を指標として判断
資源の状態	SSB (2018 年) 110 万トン (≈ 66%)
管理措置	漁業停止
最新の資源評価年	2018 年
次回の資源評価年	2019 年